

島津さん、あの世で思う存分京都めぐりをしてください

東京大学大学院総合文化研究科教授 楊 凱榮

あまりにも早い別れでした。島津さんの訃報を聞いたとき、まさかという気持ちでした。島津さんとは私が御茶の水女子大学で非常勤をしていた時に知り合いました。当時彼女は修士課程の院生として、私の文法講義の授業に出ていました。授業に欠かさず出席し、真面目な学生でした。彼女は授業や研究会などではあまり発言しませんが、たまに発言するときはいつも核心をつくような鋭いものでした。中国語研究に対する真摯な態度と観察の鋭さは彼女がこれまで書いてきた論文やその総まとめとも言える博士論文からもその一端をうかがい知ることができます。大学院生としてのスタートが遅かったためか、大学教員職に就くのはやや遅かったようですが、それだけに2010年に立命館大学に教員として採用されたときの喜びはひとしおだったようです。その年の年賀状には就職の報告と同時に、せっかく京都に来たので、京都めぐりをしたいとしたりしていました。その後も年賀状のやり取りは続き、毎年もらう年賀状には京都めぐりを楽しみにしているが、いまだに忙しくて実現していないと3年続けて書いてありました。その後、学会でお会いした際にやっと京都めぐりが実現したとうれしそうに言っていたのを今でも忘れられません。それが京都赴任後の4年目、今から3年前だったと記憶しています。このたびの訃報は、やっと京都での生活にも慣れ、これからは研究や教育だけでなく、京都生活を楽しむ余裕も出てきたのかなと思っていた矢先のことでした。

人柄も真面目で誠実な彼女は口数は少ないものの、いつもニコニコしていて多くの人から好かれる存在でした。日本中国語学会にも事務局幹事として尽力されていたようです。これからは学会にとっても大きな存

在になると期待されていたのに、彼女の死は大学だけでなく、学会にとっても本当に大きな損失です。彼女のすべてが思い出として語りつづけられるでしょう。

島津さん、あの世で思う存分京都めぐりをしてください。ご冥福をお祈りします。